

土屋 正義 編輯

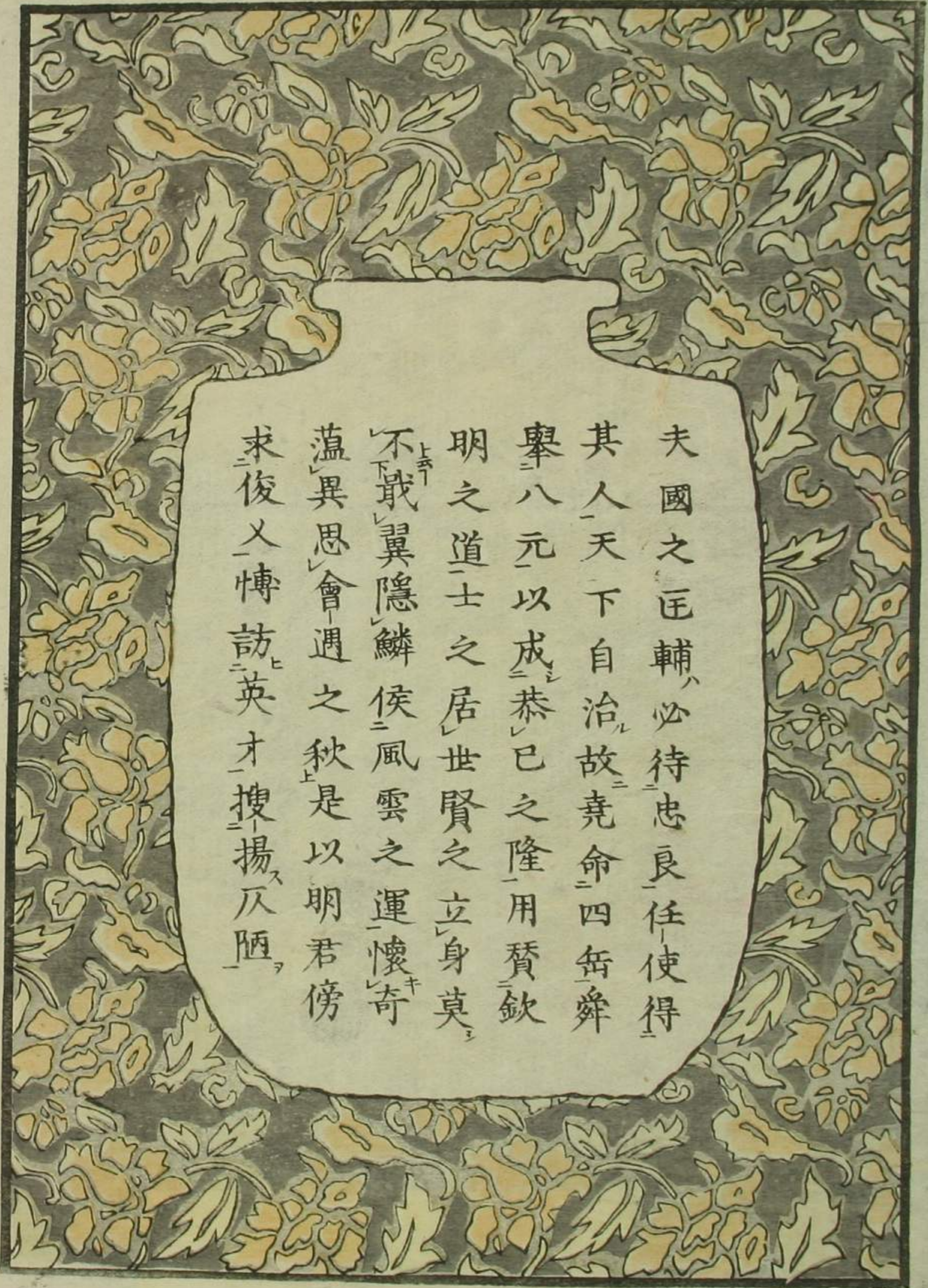
繪本石山軍記

一

特
遠14
2269
1



門八遠 14
2269
1-80



夫國之匡輔，必待忠良。任使得其人，天下自治。故堯命四岳，舜舉八元，以成恭己之隆。用賢欽明之道，士之居世，賢之立身，莫不戢翼隱鱗，候風雲之運，懷奇蘊異，思會遇之秋。是以明君傍求，俊乂博訪，英才搜揚，仄陋

石山軍記

石山軍記初篇卷之一

親鸞聖人

聖人御詠

人間亦
任
任
淨
あり
あり
あり
あり
あり
あり
あり



方角
如

口ノ一

紀州鷲の森合戦
 小鈴木孫六越前守
 踊をあして佛敵の
 亡たふ祝むる図
 此圖の訳は第二編の
 委々述べた



鈴木孫六

顯如上人



五ノ宣巳切高卷六

〇口二

不ノ上ノ言ノ不ノ解ノ六ノ一



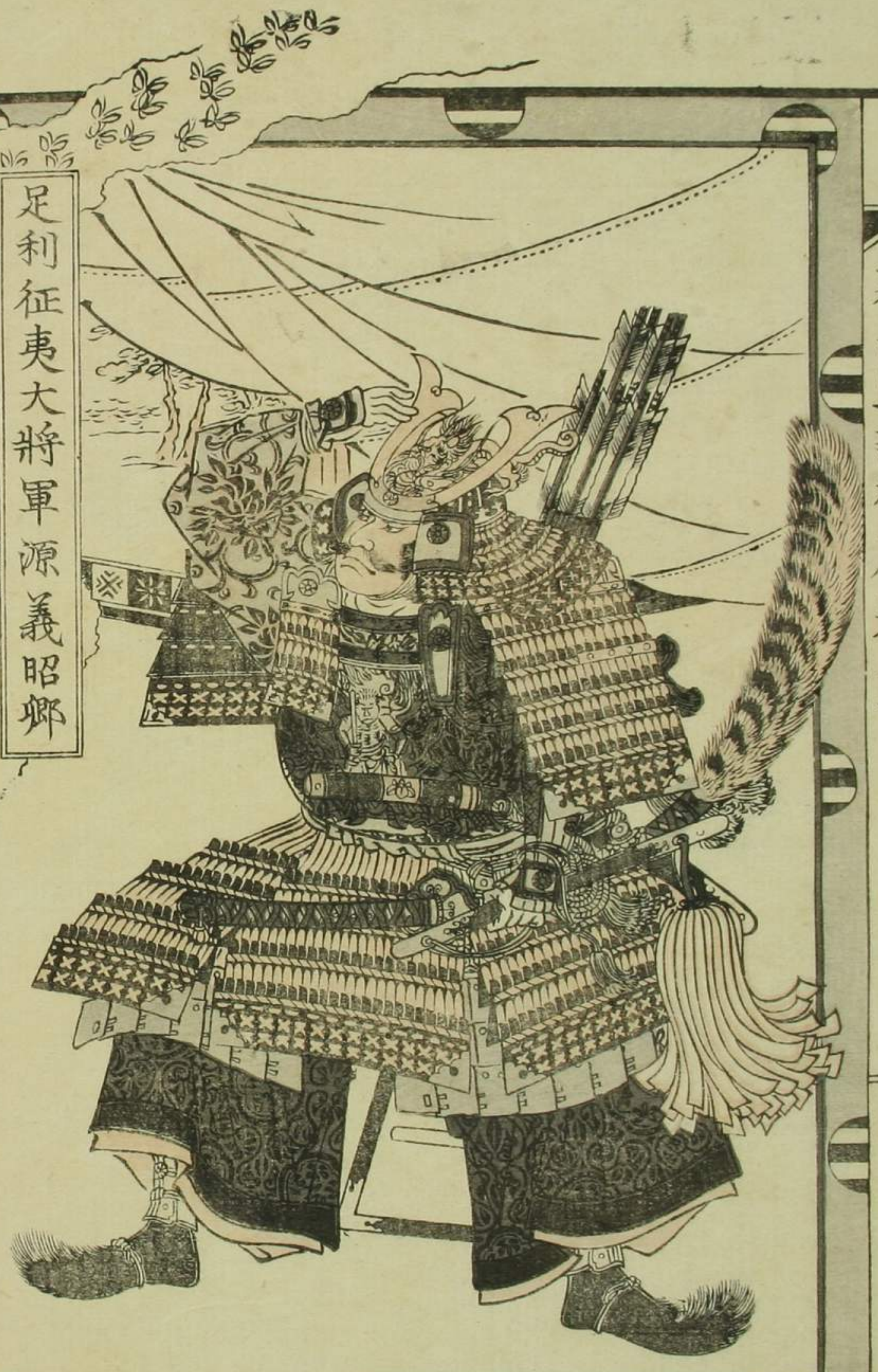
織田上総介彈正忠平信長朝臣

木村蘭丸長康

石山宣元刀高卷之二

〇口三

足利征夷大將軍源義昭卿



石山宣元初篇老之一

織田良臣木下藤吉郎平秀吉



石山軍已刃高卷之一

甲日

石山軍詩初篇卷之一

美濃浪士明智十兵衛尉源光秀





下間按察使法橋源頼龍



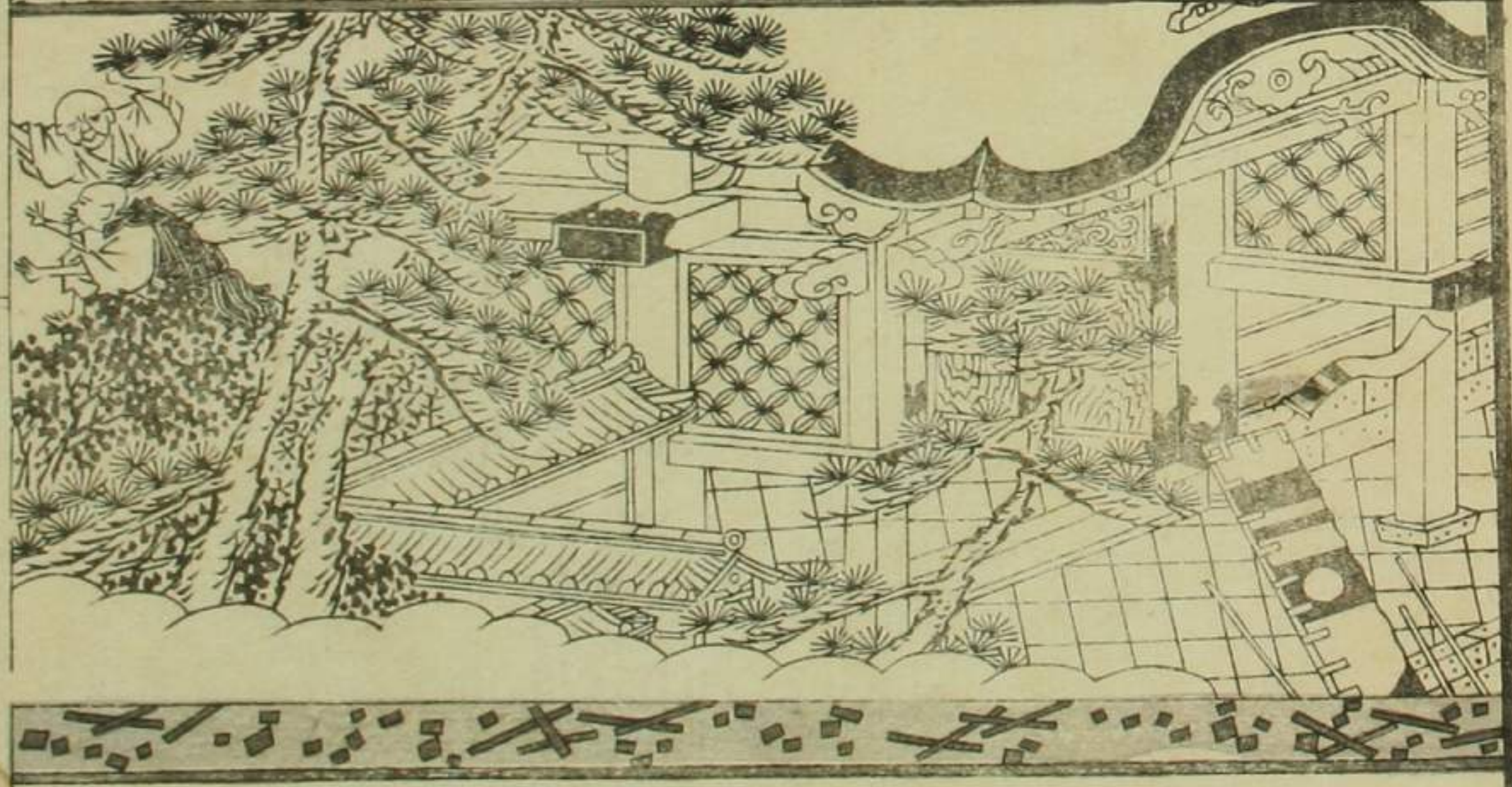
石山軍帥鈴木源左衛門尉重幸

攝州石山本願寺畧縁起并省圖

攝州東生郡生玉ノ莊石山本願寺ノ御堂ト称スルハ
 第八代蓮如大明應五年ノ建立ニシテ教法有縁ノ
 靈場ナリ其初ハ高祖親鸞聖人弘長三年壬戌土月
 廿八日御年九十歳ニテ遷化シ給フ余後關山ノ御女覺信尼云
 御弟子高田ノ頭智房等洛東大谷ニ地ヲ求メ聖
 人ノ廟堂ヲ建他力念佛ノ道場トス信心ノ門葉偈仰
 七ノ事宗祖御在世ニ異ナラス時ノ帝龜山院殊ニ御
 信仰坐テ文永九年本願寺ト號ヲ賜リ勅願所トナシ
 給フ弘安三年聖人ノ三男善鸞御房ノ御子ヲ以テ住
 職ト成シ参ラス本願寺第二代如信上人ト申ス是
 ナリ第三代覺如上人四代善如上人五代純如上人六代巧



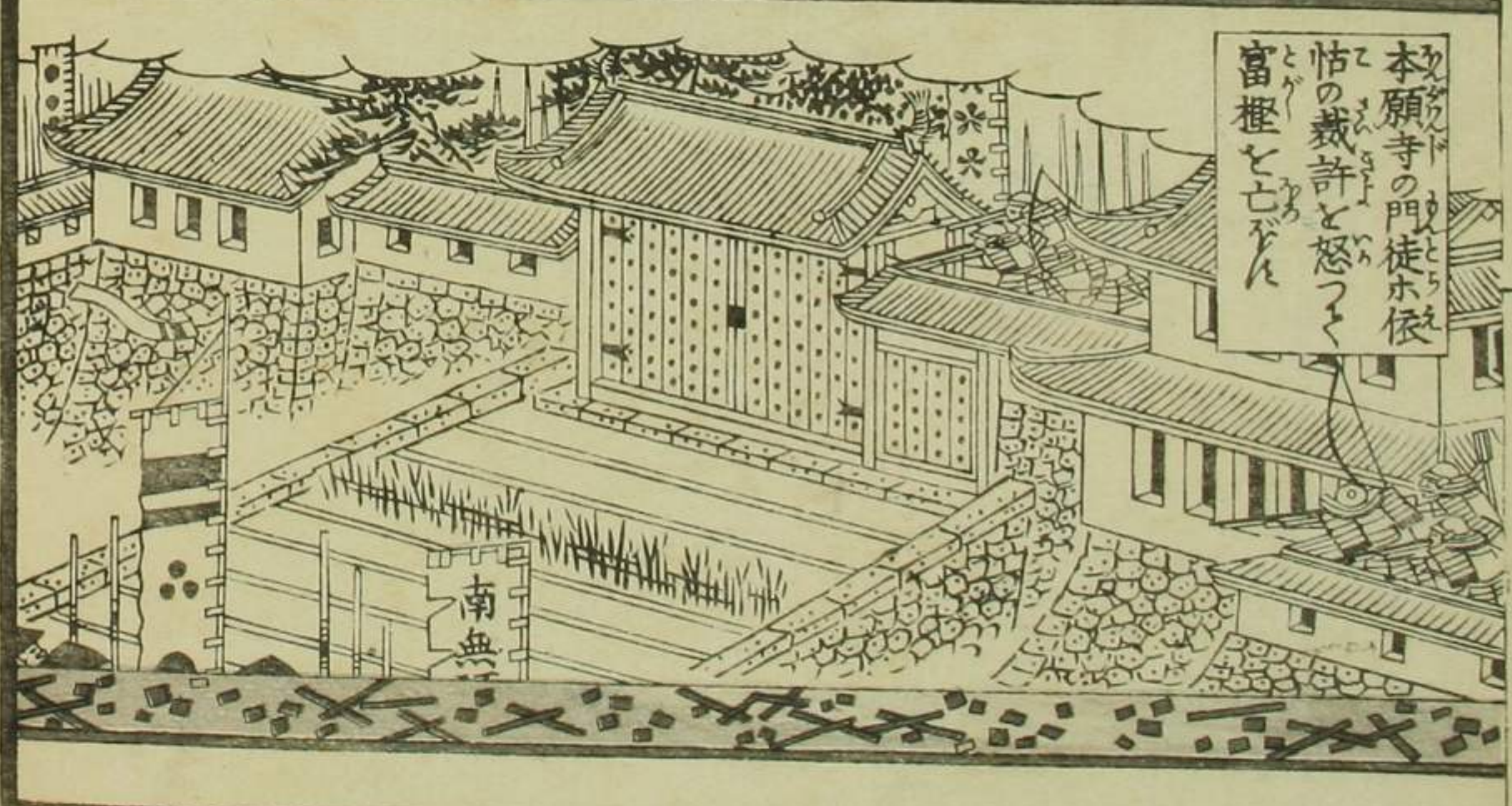
如上人七代存如上人八代八則蓮如上人ニシテ存如上人ノ
 嫡男ナリ才徳高才ハシケ程ニ向宗他力念佛世上ノ
 般ニ破テ其盛テ事前ノ御代ニ十倍セリ今ニ至テ中
 興關山ト尊稱ナス互ナリ故ニ時ノ天子後花園院蓮如
 上人ニ皈依シ給ヒ禁中ノ日華門ヲ大谷御堂ニ賜リケル然
 レ敵山ノ衆徒是ヲ嫉ミ憤リ本願寺ヲ破却セント山ノ
 惡僧輩五百余人寛正六年正月九日勢揃ヒ翌十日
 ノ曉天大谷ノ押寄ケルニ寺中ノ僧俗思ヨラセ九事ナレバ
 防支ニキ手術モ無ク我先ニト逃去ニゾ蓮如上人意
 布ノ十徳ヲ召テ姿ヲヤツシ大津ノ方ニ落サセ給フ山
 門ノ惡僧等思フ儘ニ攻入宿物錢財ヲ爭奪ヒ堂
 舎ニ火ヲ掛一片ノ烟ト燒立勝岡ヲ上テ引取ケル蓮如
 上人ハ痛マシクモ任セ給ヒシ御房モナク或ハ堅田ノ浦或
 ハ日野ノ邊ニ忍ビテ年月ヲ送り給ヒケル文明九年大津
 住人濱名太郎左衛門ト云ル者上人ヲ舩ニ乗テ参ラモ密
 ニ大津ノ飯リ己方家ニ止テ奔走シ奉リ且三井寺ノ



石山蓮如巴力篇卷之二

口ノ六

満徳院(夫)蓮如上人難渋ノ次弟ヲ物語御安座ノ計ヲ頼ケルニ元来山門ト三井寺ハ昔ヨリ其間睦ジカラカハ満徳院即時ニ兼引圓満院大僧正ト計テ三井寺ノ別所中近松寺ヲ寺領トモニ上人へ進セラレケル上人其悦ビ給ヒ則近松寺ニ移リ坐シ本堂ニ祖師ノ真影ヲ安置シ三年許此所ニ住セ給ヒ其後文明三年御子蓮淳ヲ近松寺ノ住持トシ上人ハ大津ヲ去リ越前國へ下向シ給ヒ専ラ教化シ給ヒ信心隨喜ノ徒夥シク就中越前ノ守護職朝倉彈正左衛尉敏景吉崎ノ地ヲ寄附有シヨリ此所小ノ宇ノ御堂ヲ建立アリカ國々ノ諸民是ヲ御山ト号シ參詣恭敬ス友晝夜引モ切ス實ニ京都鎌倉ノ靈場ニ異ナラス斯テ此ニ住セ給フ事五箇年ナリガ上人ノ近臣下間安藝ト云ル者ノ所爲ヨリテ此御堂忽ニ退轉ニ及ヘリ其始末ヲ尋ルニ去ル嘉禄二年親鸞聖人下野國大内ノ莊高田ト言所ニ宇ノ御堂ヲ建立アリテ

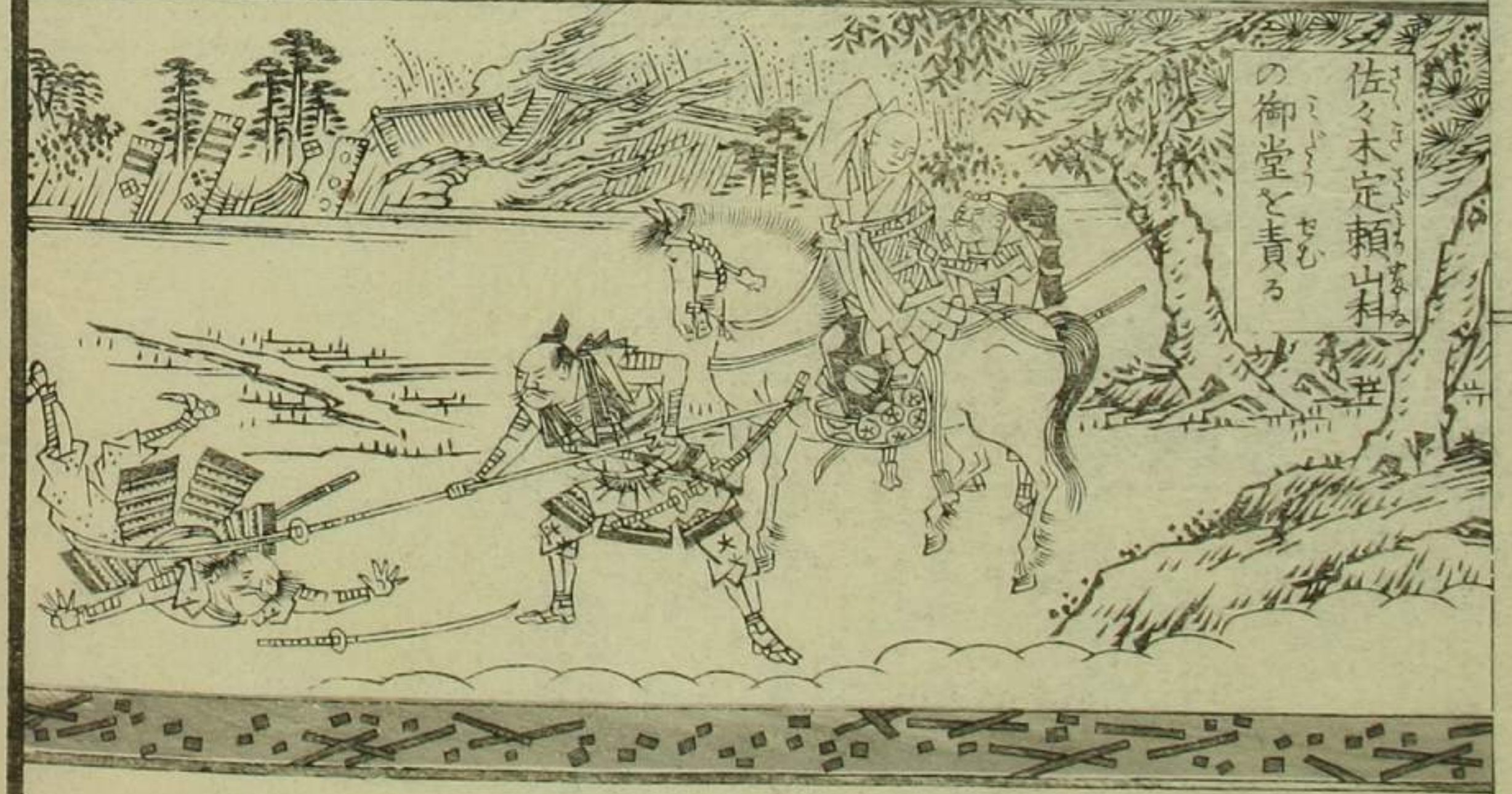


本願寺の門徒ホ依怙の裁許と怒つ富樫と亡ん

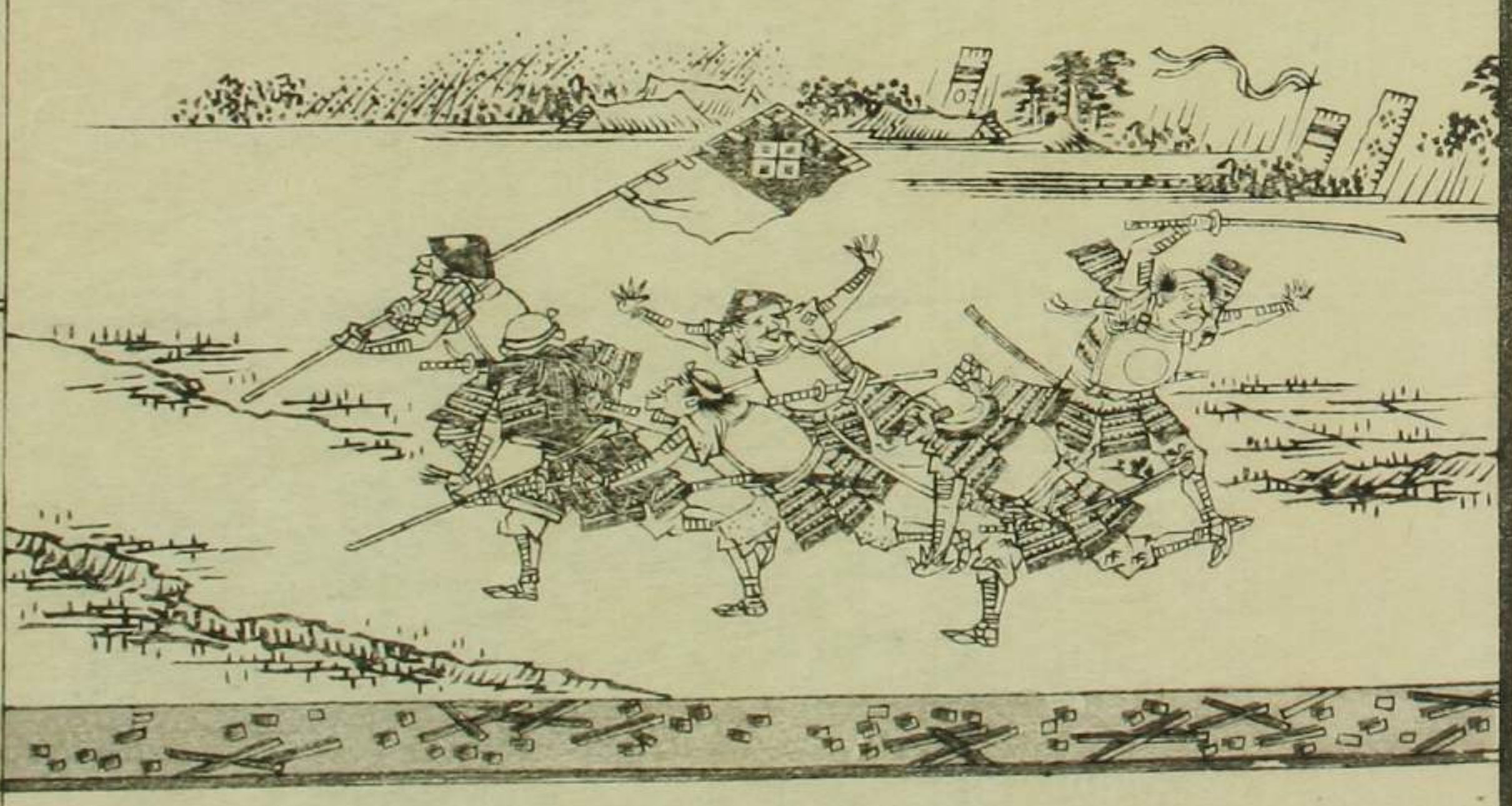
上足ノ御弟子真佛房ヲ住職トシ給フ是ヲ高田專修寺ト云聖人遷化ノ後ハ北國七州此高田專修寺ノ門徒多カリ蓮如上人吉崎ニ御堂ヲ建立アリテヨリ北國悉ク上人ノ化導ニ皈依シ吉崎ノ敏泰昌日夜ノ參詣間斷ナク是ニ依テ高田汎本願寺汎ト風儀別レ中ニ加賀國ノ土民百姓專ラ弥陀專念ノ宗ヲ信仰シ本願高田兩寺ヲ所々ニ建置テ且暮參詣怠ラス本願寺汎ヨリハ親鸞聖人ノ御弟子真佛房ノ開基タル專修寺ニバ高田汎本願寺ニ非スト謗リ高田ヨリ汎本願寺ヨリ山滅後覺信尼ノ草創有ニ大谷本願寺ニハ争カ是ヲ本寺ト言ヒ互ニ争ヒ止サリ程ニ終ニ上ノ批判ヲ受裁許ラ蒙ラントス加賀國主富樫公政親滅亡ノ時節ヤ到來シタリケシ大明ハ偏照スル度ナク至公ハ私ノ親シキナント社云ルニ政親イカナル度ニヤ高田汎ニ荷擔シ本願寺汎門徒ヨリ訴ル所ヲ非義ニ落シケル去程ニ本願寺ノ門徒等大ニ憤リ此上ハ子細ニ富樫分



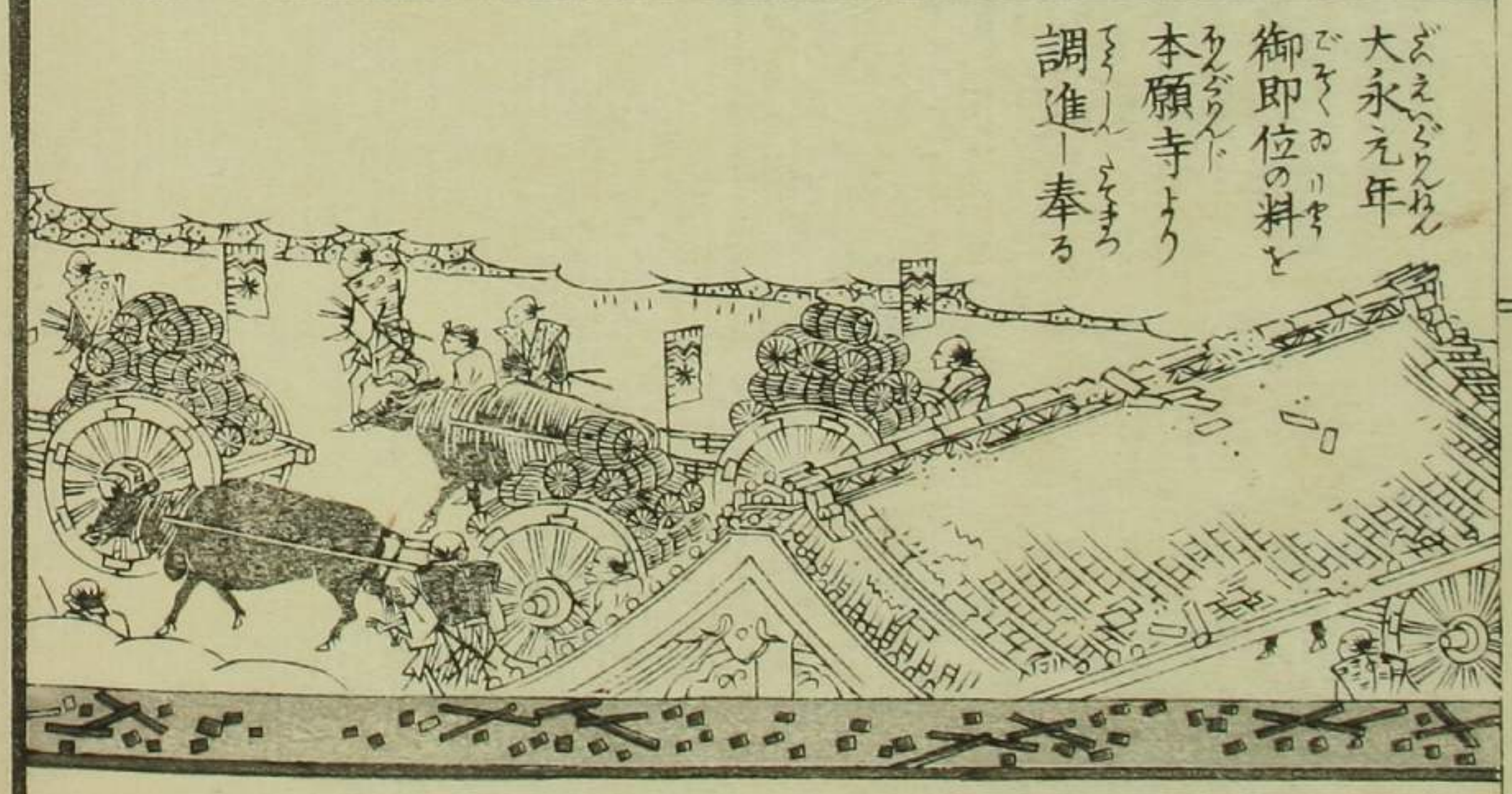
ヨ我等方法敵ナレ去ラ思ヒ知ラセヨトテ郷民ホ一揆ヲ
企テ允其門徒ノ中ニ年老貞實ノ者アリテ急キ越
前吉崎ノ御堂ニ参リ下間安藝入道蓮宗ニ附テ事
次第ヲ言上レ上ヨリ御詞ヲ掛レ門徒ノ怒ヲ宥
メラレ候ハ諍乱モ相止メ國中ノ老少男女何ノ欲ヒカ是
ニ勝レ急キテ傳達給ハルニト申ケルニ原末此下間安藝
富樫ヲ限テ事有ケル心中ニ是ヲ喜ヒ此奉ニ乘テ富樫
介スハ討亡シ我自フ加賀國ヲ押領セント惡念ヲ發上
人ノ御前ニ出テ言ヤウ金澤ノ富樫介國中ノ御門葉
ヲ追放シ御宗旨ヲ永ク斷絶セシメト企テ故加賀門
徒等一黨ニ富樫ヲ討取ントス當本寺ヨリ大將入
下九ヘキ旨願ヒ未候フト誠ニヤカニ申ケレバ上人太驚
キ給ヒ是ハ一方ナラヌ大事ナリ子細ヲ委ク尋問ヘシ
其使ヲ召出シ候ト仰允ニ下間安藝取敢ス其使セシ門
徒ハ速飯國致シ候フト申上備加賀ノ門徒ニ逢テハ汝一
足モ早ク國ニ飯リ近國ノ門徒等ヲ語ラヒ合戦ノ用意ス



ベシ當本寺ヨリモ大將一人遣ハサレキ上人ノ御意ナリト
言聞スレバ彼門徒大驚キ是ハ思寄ル上人ノ御仰カ不
仰天シテ固ニ飯リ又斯テ下間安藝ハ藤島ノ超勝寺ホ
ヲ語ラヒ自ラ大將トナリテ加賀國發向セント其用意取
ナリ富樫介早クモ此由ヲ聞惡キ坊主原カ行状カナ其儀
ス吉崎ハ押寄蓮如ヲ初メ寺中ノ奴原人モ残ラス討
殺セトテ三百余騎ノ兵士ヲ卒ニ越前サテ攻来ル其道
條ノ門徒等是ヲ見テ大ニ悲シ我先ニト吉崎ニ参リ夏
次第ヲ注進スレバ上人再回驚カヒ給ヒ扱ヒ惡キ安藝カ所
爲カナ我元来露許モ此事ヲ知ラズ事既ニ爰ニ至リ
今更如何トモ爲カナレ何ニシテ此所ニ住レ難シトテ俄ニ船ニ
召レ若狭ノ小濱ニ落サセ給フ是ハ維文明七年八月九日夜
ナリ今時ニ下間安藝ハ思設又逆寄ニ合テ行方知ラス
落失ケリ程ナク富樫介正親軍勢引具シ寄来ニ寺
中ノ男女落去テ人影モ見ガレ益々怒リテ寺境ヲ放火
堂宇ヲ残ラス燒尽シ直ニ藤島ノ超勝寺ニ攻寄是



同火ヲ放チテ燒亡シ勝鬨ヲ揚引取テ是ヨリテ加
 賀能登越前ニ有程ノ本願寺未寺道俗ノ門徒憤リ
 ヲ發シ忽チ揆ヲ爲シ金澤ノ押寄富樫介ト合戰數年
 及上ニ或ハ討チ或ハ討レ勝負未タ決セザリテ爰ニ藤
 太夫今枝大膳ト云九浪人一揆如北國七州ノ門徒ヲ催
 集テ大將ト成テ指揮ス程ニ富樫介終ニ敗軍ニテ切腹シ
 死シ多ク門徒一揆勢ト斯如ク國主ヲサシ攻屠ハ況ヤ郡
 代莊官ナレトハ屑トモセス從フ者ハ味方トシ敵對者ハ
 攻寄テ踏崩シ心ノ儘ニ國郡ヲ掠取程ニ原來一揆ノ事
 ナレ法令立ス其村ハ枝支配ナリ此ノ郡ハ其カ領分ナ
 リト互ニ爭論ニ及ヒ後ニ同土軍モ有ケルニ年老テ長
 人シキ者ホ集リテ是ヲ愁ヒ斯テハ國中靜謐ノ事
 有ヘカス單竟ハ宗吉ノ爲ニ伐取タル國郡ナレ本願
 寺ノ領地ヲ捧ケ地頭役人ヲ申受其下知ニ隨スレト
 申テ門徒ホ一統ニ九ト同シ是ヨリ本願寺ノ支配所
 ト成テ加賀能登ノ兩國都テ本願寺ノ領分トナレリ



大永元年
 御即位の料と
 本願寺より
 調進奉る

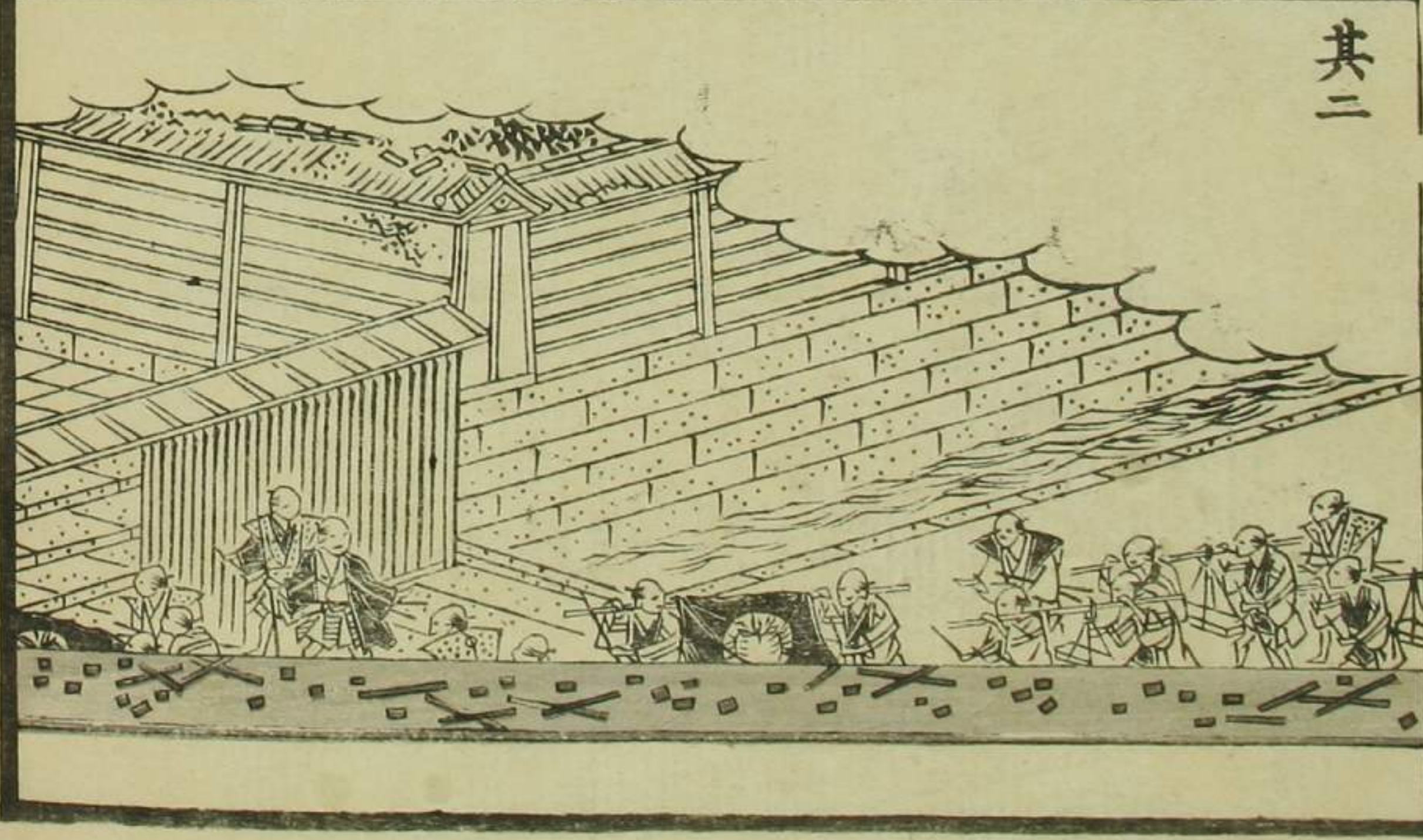
儲亦違如上ノ若狹ヨリ丹波路ヲ徑テ摂津國富田ノ
 莊ニ暫ク止リ給ヒ文明九年山城國山科ノ郷ニ本寺ヲ建
 立有ヘシト彼方ニ赴カ給ヒ森道西ノカヲ合セ九年ヲ經
 テ文明十七年柳造營全ク調ヒ天津近松寺ヨリ御眞影
 遷シ是ヲ守護シ爰ニ住セ給フ事十二年是ヲ山科ノ
 御堂ト稱ス延徳元年當寺ノ又男實如上人ニ讓リ
 坐シ明應五年泉州堀ノ御下向アリ此時ニ至テ攝
 州東生郡生玉ノ莊石山ヲ巡覽アリテ其勝地ナラ賞シ
 給ヒ此ニ寺ヲ建立シ給フ是ヲ石山ノ御堂ト稱ス余續
 應八年己未三月九日山科ノ御坊ニ於テ蓮如上人遷
 化シ給フ時ニ御年八十五歳ナリ則實如上人第九代
 相承シ給フ然ニ皇百五代後柏原院文龜元年踐祚ノ
 後二十年ヲ過ト雖モ應仁ノ兵乱以來朝廷衰微シ天
 下諸侯モ亦其料ヲ調進スル者ナキ故ニ未タ御即位
 大禮ヲ行ハズ是ニ於テ西三條前内府道遠院亮空執
 奏ヲ以テ御即位ノ料ヲ本願寺實如上人ヨリ調進シ



石山軍已力篇卷之一

〇九

奉り而シテ大永元年辛巳正月廿二日改テ御即位ノ大禮行
 此勸賞トシテ實如上ノ御門跡ノ号勅許並ニ菊桐
 御故ヲ賜リ且香衣ヲ給フ時ニ大永五年二月二日実如上
 人御年六十八ニテ御遷化アリ依テ證如上人十歳ニテ
 十代ヲ相兼シ給フ故ニ家老下間恣ニ執事シケバ下間
 後兄弟ノ威勢強ク上ヲ恐レ我意ニ募リ加賀國ニ下向
 知行所坊主門徒ヲ聚集シ近國近在ヲ乱妨シ地頭ヲ殺
 郡主ヲ追討切取土地夥ク北國ノ騷動大ナラズ時天
 文元年證如上人御年十七歳ニ成ラセ給フ八月不慮禍
 出来リ其起原ト謂ハ江州觀音寺ノ城主佐々木六角
 彈正定頼本願寺ノ家老下間ガ我意ノ働キ多キヨリ
 起ツテ本願寺ト六角定頼互ニ恨ヲ結フ夏アリ直
 定頼ハ無二日蓮宗ニ有ケル念佛宗門ノ本願寺ヲ繁
 榮セルヲ平生妬ミ久故今度日蓮宗ノ僧徒許多語
 ラヒ其勢三千許不意起ツテ山科ノ御堂ノ押見八
 方ヨリ取圍ミ火ヲ放テ寺中ノ乱入ス本願寺ノ僧徒亦



驚テ防ミ支ントス共多勢ノ寄手ト云殊更ニ風烈ク堂宇
 圓ニ燬上ノ周章逃行道ヲ辨ヘス烟ニ哽ヒ手足ヲ爛キ或
 ハ敵ニ斬倒サレ喚キトテ形勢目モ當ラズ事共ナリ斯有
 所ニ證如上人近臣下間上野法橋頼慶ト云者アリ余
 一族非道ニ似ス智勇兼備シ忠信無ニ士ナリケル此体ヲ
 見テ急キ上人ノ御前ニ至リ今ハ早御堂ニ火掛リ支難
 ク候フ程ニ先石山ノ御退去アリテ然ルニト申斐々敷
 上人ヲ馬ニ乘進ラセ高祖聖人ノ真影ヲ香ニカシ付
 大薙刀ヲ馬手ニ引提弓手ニ六上人ノ御馬ノ口ヲ取
 裏門ヨリ出ントスバ寄手ノ大軍雲霞ノ如ク四首結
 ノ大旗數十流入替々々落人ヲ遁スナト呼ハツテ敵ノ如
 ク群リ来ルヲ頼慶オツト喚ブト見ヘシカ近ヨル敵兵五
 六騎ヲ目ニモ見セス薙落セ誰カ命ノ惜マザラシ勇
 ミ進ミシ寄手ノ大軍左右へ退タリケル頼慶
 得タリト上人ノ御馬ヲ進メ群ル敵ノ正中ヲ文字守
 切入テ道ヲ求メテ落行ケル追来敵ヲ斬拂ヒ引返



石山軍已力高...

ロント

シテ八難例ニ身命ヲ捨テ防ギケル此事早ク諸方固
 (ケルニヤ上人の御難ヲ救ヒ奉ツラトテ信心ノ門徒亦百
 姓町人老若男女ノ差別ナク或ハ竹籠或ハ鋤鋤思ヒ一ニ
 引提ツ此ニ北人被ヨリ北人寄集リク追来ル敵ヲ支ヘ
 防ギテ上人ヲ守護シ奉リ三嶋江邊マテ落タリケルニ
 大坂野田福嶋ノ門徒六百余人此由ヲ聞テ齊ク御迎ノ
 爲參着シ船ニテ上人ヲ野田ノ御堂へ入参ラセ敵ノ多勢
 フ引受一日一夜火水ニシテ戦ヒケル河内ノ門徒二千余
 走加リ門徒ノ勢ヒ益々強ク佐々木ノ黨百連宗ノ僧
 徒等戦ニ疲レテ敗走シ思ヒクニ逃失テ野田福嶋ニ敵
 一人モ有セハ上人斜トテ救ヒ給ヒ是全ク門徒ノ僧俗身
 命ヲ捨テ敵ヲ支ヘ故ニリトテ夫々ニ褒美ノ御詞賜
 アリケ去程ニ上人ハ山科ノ御堂冬上ニ及ヒシカ振州石
 山ノ御堂ヲ修造シ是ヲ本山ト定メ給ヒ關山ノ御真影
 フ安置シ弥宗風廣ク教導シ給フ程ニ四方ノ道俗日夜朝
 暮ニ參詣禮拜シ他カ本願ノ御慈悲ヲ歎ヒテ日々發願

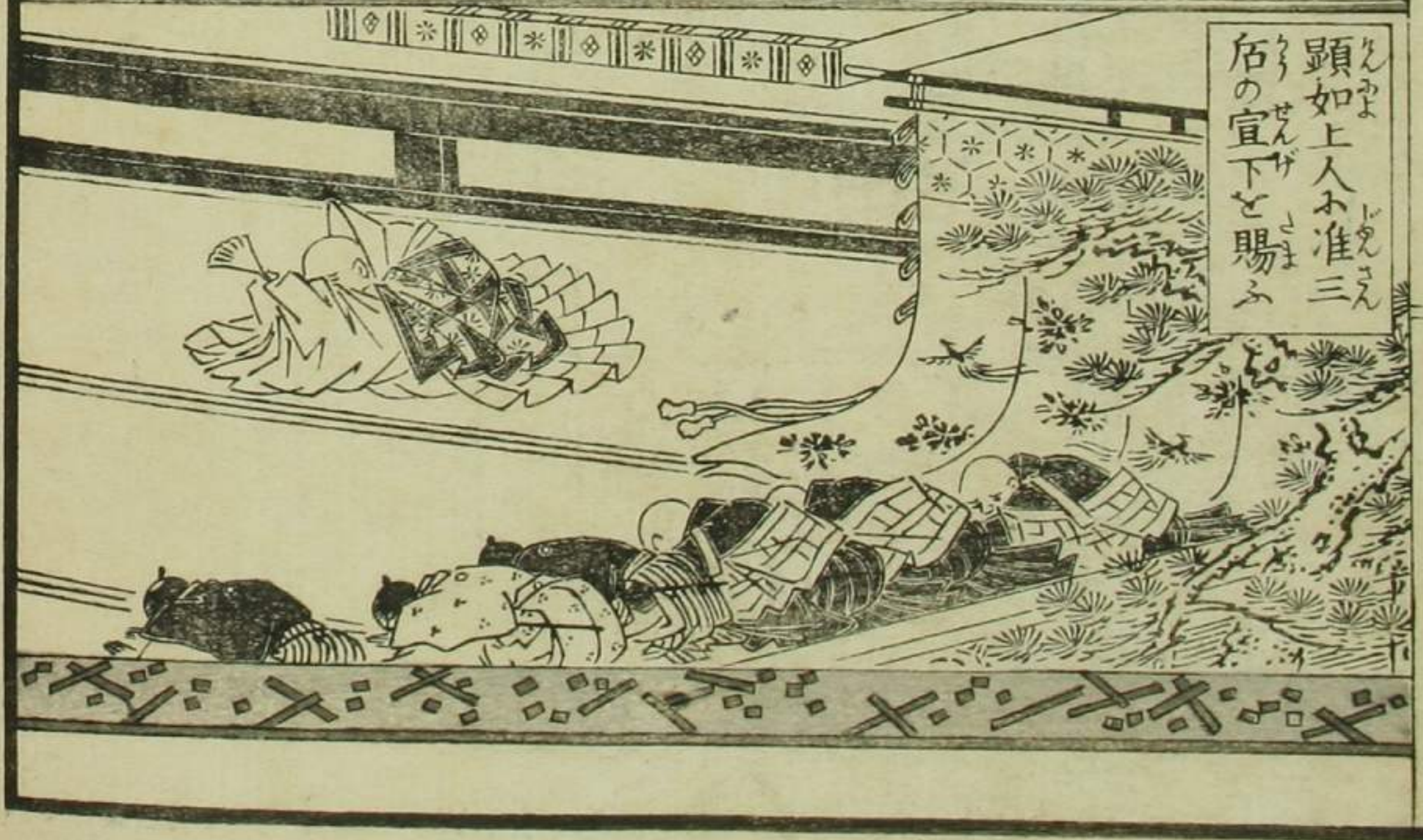


三其

限リナシテ時去ル大永七年當今後奈良院御受禪
 坐シケレ共志仁ノ乱後續テ四海一統于ヤヲ動シ時
 毛穩カラサルガ故ニ御即位大禮行ハズ今年天文五
 年マテ十年ノ間事延引ニ及ヒタリ周防國大守大内
 義隆其料ヲ調進セラルト雖モ都合不足ナリシ程ニ證如
 上人未ダ御若年ニ坐セシカ共本願寺ヨリ是ヲ補ヒ奉ル
 依テ速ニ大禮周備ス則天文五年二月廿六日ナリ誠ニ天
 赤曾有ノ忠功ト上京シ是ニ依テ泰モ二品親王号ノ宣
 下勅書ヲ賜フ然レ證如上人早世シ給フヨリ第十一代ノ
 法繼ヲ頭如上ト称シ奉ル御諱光佐則テ證如上人嫡
 男ナリ今年加賀國ノ末寺僧侶門徒輩ニ万余人ノ探
 フ企テ所々國郡ヲ切取本願寺ノ領知トナスヲ夥シ越
 中國主畠山修理大夫モ此ニ黨本國ヲ責破ラレ江州ニ敗
 走シ佐々木貞禎ヲ頼ミ執居セラレシ程ニ今ハ加賀能登
 越中ニ三ヶ國ニ本願寺ノ所領トナリ年々金銀米錢
 フ石山ニ運送ス程ニ本願寺ノ勢ヒ日々強ク肩ヲ並フ



ル武家モナシ勝ニ誇ル門徒等越前ヲモ切取ント国
 主朝倉教景入道宗満排戦一既三年北国ノ動
 乱甚ク故ニ弘仁二年京都將軍義輝公ヨリ御教書下
 リ兩國ヲ扱ヒ給ヒ暫ク合戦ハ止タリケル時ニ本願寺九代
 十代打續キ兩度密祚ノ輔功大ナリト雖モ諸國ノ擾乱
 止時ナク依テ其感賞ヲ賜フ是ニ於テ去ル弘治元年
 後奈良院奉書ヲ頭如上人ニ賜ル永祿三年十二月十五日
 准三石宣下アリ頭如上人ハ天文十二年癸卯御誕生ニシテ
 母公八源中納言重親卿ノ息女ナリ然レハ今永祿申年ハ
 十八歳ノ御時ナリ去程ニ官位益々昇進シ給ヒ其數官ナ
 レニシ尤往昔龜山帝ノ御宇紫震殿ヲ拜領有テ御堂
 紫震殿ノ模形ナリ且當御簾中ノ管領細川右京大夫晴
 元ノ息女ナリ故ニ本願寺ノ威勢強大ナリ同五年ノ秋又マヤ
 加洲ノ門徒等朝倉ノ下知ノ背キ再ビ合戦始マル故京都
 通路ヲ塞キテ米穀運送ナリカダシ上方甚ク困窮ニ及
 ビシカバ將軍義輝公此度ハ大館左門佐武田治部少輔



頭如上人ハ准三石の宣下を賜ふ

兩使ヲ以テ上使トシ御教書ヲ帶ビ北国ニ下リ朝倉ト本
 願寺ノ鬪戦ヲ鎮メ且和睦相違非ル證ニ朝倉義景カ息
 女ヲ以テ頭如上人嫡男茶々丸ニ妻合スキ旨詰問セラレ
 シカバ双方上意ニ忌シ謹テ婚姻ノ盟約ヲ成シ終ニ兩國ノ
 合戦靜リ朝倉ト本願寺唇齒ノ因ヲ結ビ相互急難
 フ助ケ救フベシト約束シ無ニ中トハ成テリ後年ニ至リテ
 織田信長ト本願寺確執ニ及ビ十余年ノ合戦ハ此一事
 ヲリ發生セリ此茶々丸ト稱スルハ永祿元年ノ誕生ニシテ今
 年五歳後ニ教如上人ト申奉ル若君ナリ其初織田朝
 倉兩家共ニ公方武臣武備斯波義廉老臣ナリシガ
 去ル志仁頃山名細川乱ヲナセシ時朝倉ハ治部大輔義
 敏ニ心ヲ合セ主君義廉ヲ叛キ公方家ノ味方ニ參リ終ニ
 越前ノ守護職ヲ奪ヒ公方直參越前ノ国主ニ押成リ
 朝倉彈正忠敏景ト名リ諸侯ノ中ニ列リ織田ハ代々
 義隆子孫ヲ主君ト仰ギ尾州清洲ノ城ニ立オキ其身
 ハ執權トシテ尾州ノ乱ヲ切鎮メテ是ニ依テ織田家ヨリ



ハ朝倉ヲ逆臣ノ家ナリト朝リ朝倉家ヨリ織田ヲ倍臣
ト誨リ文明永祿ニ至ツテ兩家確執止サリケル然ニ近年
信長美濃齊藤ヲ攻ル急ナリ齊藤越前朝倉
ニ助カレテ朝倉是ニ味シ織田ト合戦ニ及ブ數回ナリ
斯有シ程織田ト朝倉怨敵トナリ互ニ責亡サントス然今
度本願寺朝倉縁ヲ結ビケレ北國ノ門徒等ハ朝倉家
ニカラ添織田方ヲ惡シ兩家合戦ヲ取合フ時ハ必ス門
徒ノ揆等横鎗ヲ入レ織田ノ妨ゲラ成シ程ニ元來意地
強キ信長心中ニ甚ガ是ヲ憤リ朝倉ヲ亡シ後本願寺
ヲ打潰シ彼宗門ヲ破滅セシ今憤リヲ晴サシモノト未
ダ若年其時ヨリ心内ニ積シ事ニシテ朝一夕ノ夏ニハ
非ストナン

自是後織田上総介信長石山本願寺ト合戦ニ及ビ
十有餘年間勝敗ハ本文ニ詳ニス得讀可知



繪本石山軍記初篇卷之一

目錄

- 足利將軍累代治亂
- 并義晴將軍坂本御退座
- 穴大山中義晴覺也
- 并細川晴元堅田小蝨也
- 松永細川洛東ノ争戰
- 并義輝將軍室町小入御

大文字山

黒谷



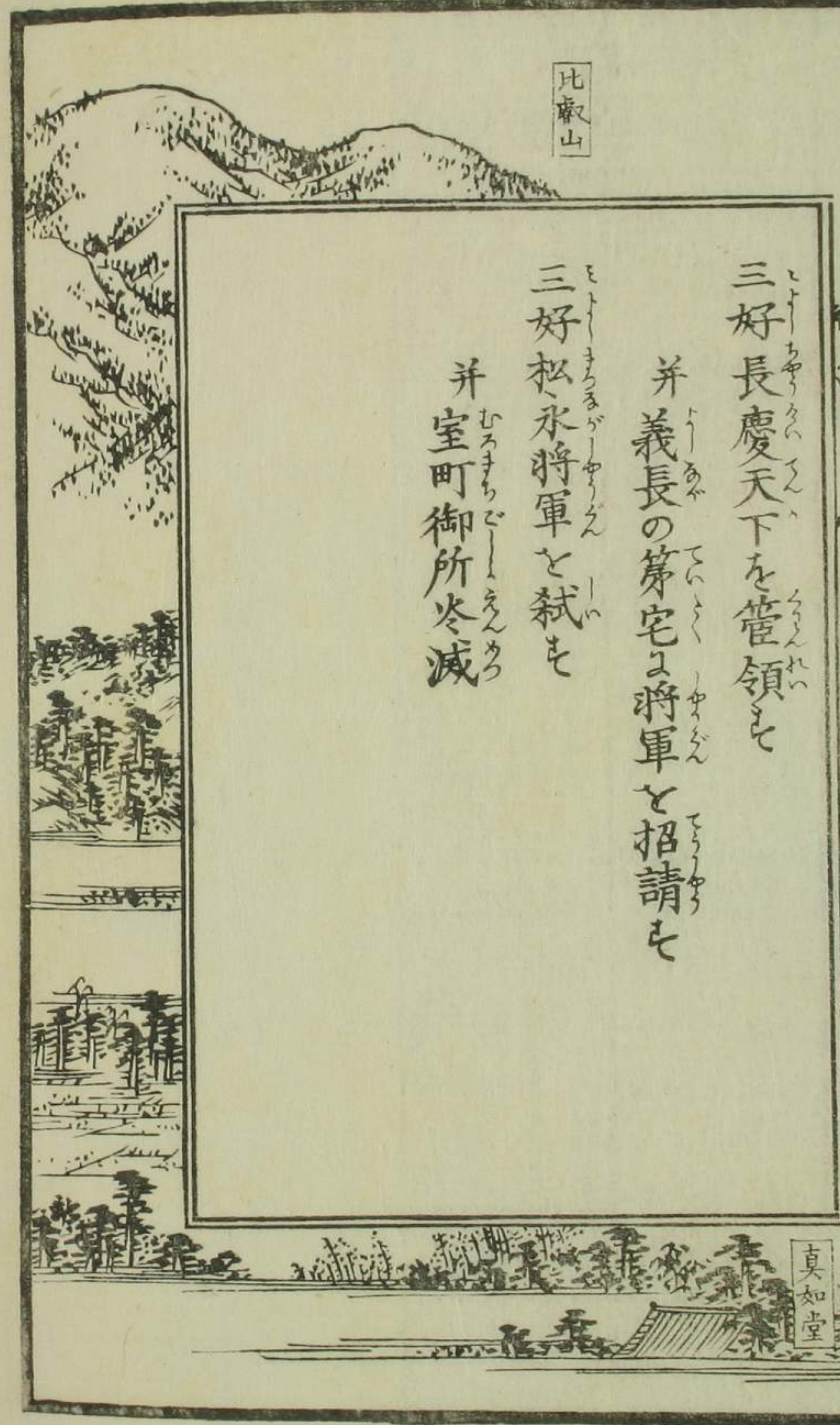
三好長慶天下を管領とす

并義長の第宅に將軍と招請とす

三好松永將軍と弑とす

并室町御所を滅

比叡山



繪本石山軍記初篇卷之一

大正二年九月廿五日
本校出版部氏印

土屋正義 編輯



足利將軍累代治亂 并義晴將軍坂本御退座

夫聖人國に在時ハ必以治を賢人家に住時ハ安寧あり。上仁義ハ暗

と則ハ下必以讒者威と立四海の擾乱終ニ穩あはば逆浪天ハ漲り

狼烟地と翳多し立去ど。何きり兵革動ざる所なく。三綱五常忽ち

浪没し。子とてハ親と害し。臣とてハ君と弑とす。至は千時人皇

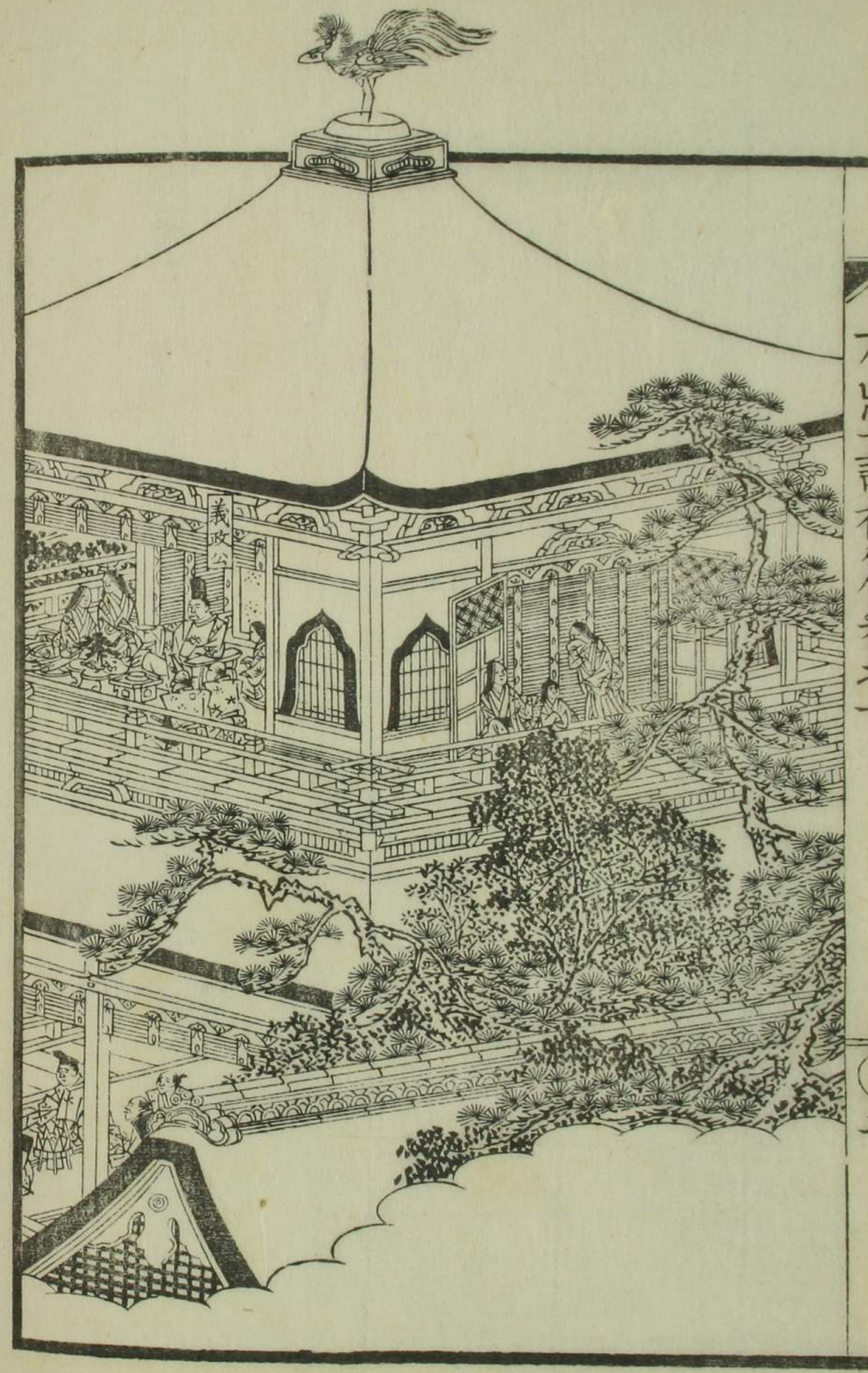
九十七代光明天皇の御宇曆應元年。足利尊氏卿征夷大將軍不補せ

ま。兵權を以て天下の成敗を執給ひしより以來既ハ十三代ハおよび

星霜凡二百卅年許と歴たりと雖も四夷ハ蠻靜謐ありし事ハ三代將

軍庶苑院義満公の御代の末のふして其他の諸國に争乱絶つこと以て。就中八代將軍慈照院義政公の御代に及んで管領四職の英雄互に威を擅ありて武命を恐まじく朝憲を忽あし。我意を募り私暱と專よ。以然るに將軍義政公歳己に三十五成せ給ふ未だ御世嗣の公達まじ。海をめぐりて故に御舍弟浄土寺の門主義尋せして還俗せしめ名を義視と改め給ふ。世に今出川殿と號と。細川勝元執事たり斯有る程。其翌年義政公に御實子誕生し給ひ。あまを義尚と名け御寵愛淺くし。依て遂に將軍と令出川殿と不和とあはせ給ふ。是に於て應仁元年四職の山名持豊入道宗全。細川勝元と殺さんと欲する事起り。矛楯し。洛中東西に陣となり。合戦數回ありて止事は

是と應仁の大乱と云文明五年三月山名宗全同五月細川勝元兩將とも小病死む。此對陣七年の中朝廷の禮儀柳管の作法をばて荒廢に至る。加之兩將一味同心の大小名國々於て合戦止時あり。天下麻の如く乱まぬ。翌文明六年義政公征夷將軍と義尚に讓め。同九年義視に京と出て美濃に下向し。此時稍く諸大名國に歸り洛中をめぐりて靜謐とあまら。去める應仁元年より文明九年に至り。十一年の間天下騷動し。本朝の旧記諸家の文書焼亡する事夥し。同十二年義政公東山の別荘に閑居し。あは高貴の賓客常小集會あり。あ茶の道と樂と和漢の奇物と翫ひ給ふ。故に東山殿と稱を薨らぬ。て後遺命によりて此所と寺と慈照寺と号を。又一名と銀閣寺



其二

足利八代將軍義政
政務不倦世を御子
義尚又譲り洛北鹿
苑寺の金閣を換
東山小銀閣と建此
閑居一々常不茶と
嗜し古器名画と耽び
高貴の賓客と常に
會して樂しむる
が故に世を東山殿と
号す



とも稱す後十代義視義量の三男十一代義植義視の長子十二代義澄政知の長子十三代義
晴義澄の長子十四代義輝義晴の長子應仁の乱後六代連綿して征夷大將軍に任
じつとゞも四維八方あぢも静謐ありて于茲義輝將軍の御時管領
細川右京大夫晴元の家臣に阿波國の三好修理大夫長慶といふ士武威天
下を震ひ倍臣にして公方家近侍に勢をばし五畿内を傾け主人細
川ハハもきども無が如く刺へ長慶將軍家の御相伴衆に経上り天下の
政道と執行ひしハ自然と權威を募り我意を恣みせり原其始ハ天
文十八年三月三好の一族宗三入道と不和ありて主人晴元負せしとて
長慶大に憤りたる故前管領細川高國の長子次郎氏綱内々父の遺恨晴
元と亡がさんと謀反の計畧怠らざるふ一議し氏綱と大将と一其勢力二万

餘騎ありて一戦ふ及べし。執事右京大夫晴元も七千七百餘騎の軍勢ありて討向
 ひ河内國三宅城又摂津國江口木の戦ひも晴元敗軍して三好宗三ハ終つて討
 死し晴元競氣已ふ盡と三宅の城と落去り主従僅十一人ありて丹波路と
 して敗北あり去程も近日細川次郎氏綱三好筑前守長慶都責上るよし
 聞へしハ將軍使と以て敗走の晴元を召ま軍議敷ありて前將軍義晴
 新將軍義輝御父子江州坂本に御退座あり供奉の諸侯先陣ハ佐々
 木左京大夫義賢三万餘騎後陣ハ執事細川右京大夫晴元五千餘騎前
 列後列調合せ先陣とて坂本に着し後陣ハ三條或ハ粟田口と
 充滿と天文十八年六月廿八日坂本に着せ給ひ常在寺と旅館と暫く月
 日と送り給ふ三好長慶京都に入る萬事を執行ひりるぞ薄情と

穴大山中に義晴薨び并細川晴元堅田に蟄居

前將軍義晴御父子江州坂本に在りて月日と経て給ひ御歎退治の計
 略怠らせ給ひ同年の秋洛東如意が嶽に城廓と築らせ給ひる執事
 細川右京大夫晴元佐々木彈正忠定頼是と奉行して造立日夜怠らば翌
 十九年の春城壘作事全く成就せし程に片時も早く入城し給ふんとす
 三月廿七日坂本と御立所つて同國穴大の山中にて如何ある天魔の告め
 有らん伊丹大和守雅興が逆心と企てぬと聞えしハ暫く此所に滞陣し
 御座まし。空しく日を送らせ給ふ然るも去年極月半將軍御違例あり
 志が良あつて御快氣ありて給ひしども又今年正月より御不
 例再發し煩せむし治療手と尽し給へども五月初旬より以ての

外重病せ給ひ終ふ同日此山中にて薨じぬ御年四十歳斯く京都より
 勅使立ち来り奉るも左大臣從一位小贈らせ給ふ御遺言より御尊骸を
 洛東慈照寺へ送り参らせ御葬禮と營はるは新將軍義輝郷今年
 十五歳みまへ給へ御飯洛の事と計りぬといへども三好が威勢盛んふ
 して容易に征伐あがらむを同日十月十日如意が嶽に不吉の城ありとて比
 叡辻密泉寺に移らせぬ充足利譜代の大名家多しと雖威權あはして
 將軍家と援ひ奉る事能はし時細川氏綱へ摂津國小陣と取り京師を
 窺ひ去年以来大津坂本と放火し相國寺と灰燼を執事右京大夫晴元
 數回合戦み及ぶとて叶はざりて敗軍せしむ一日片時も敵の競動
 證はあらず。茲ふよろしく徒み年月と送りぬひ。既み早三箇年

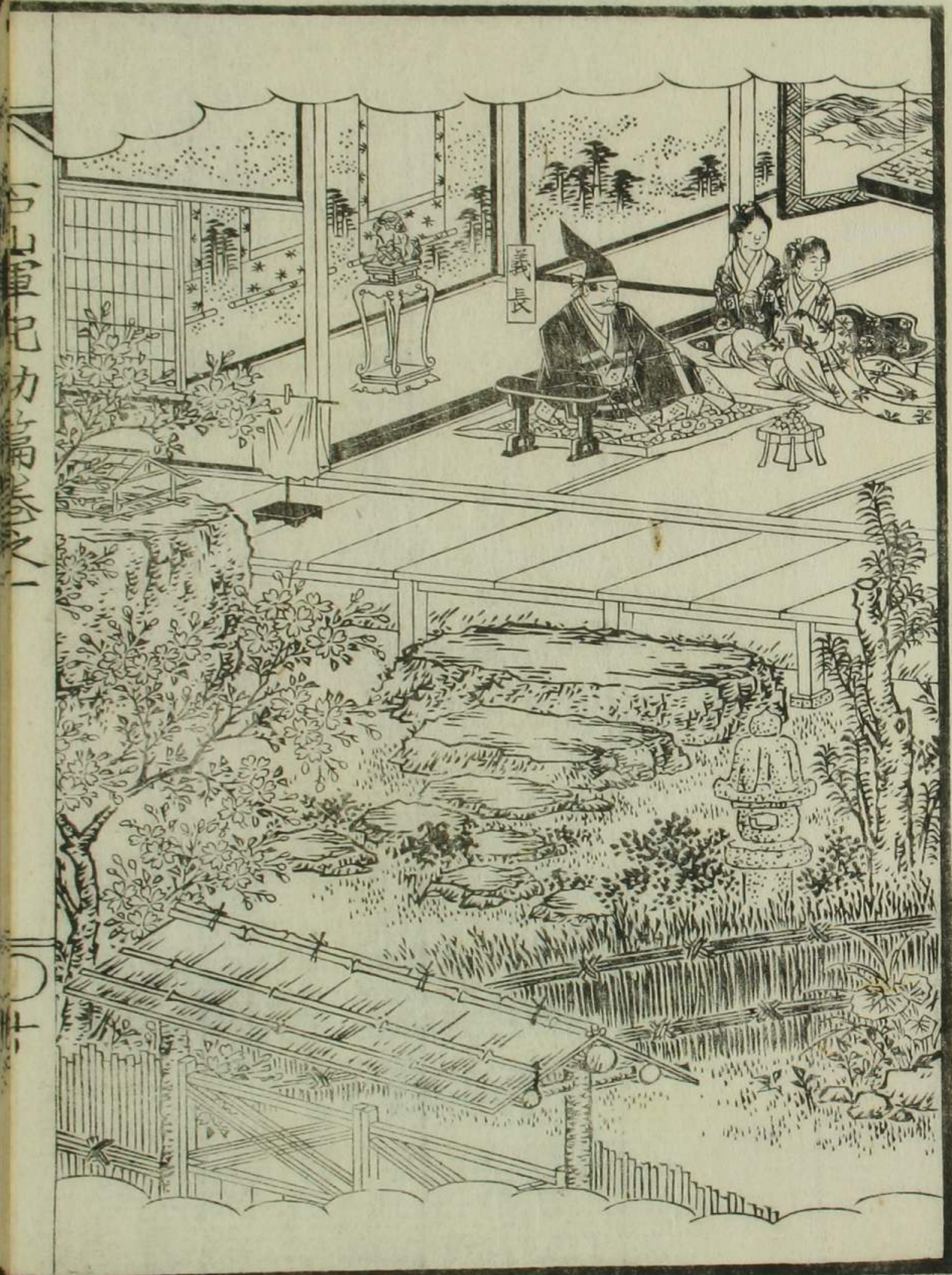
に及びたる。夫日月の明を浮雲隠し主將の徳を臣敗る寸善尺魔
 除さざり。今唯將軍の憤を捨て氏綱が罪科と宥らる管領
 の職と給り君臣和を以て天下太平の謀と廻らるる飯洛と遂ら
 るべき由諸卿會議あつて此旨仰せ下さる將軍奉りぬ畿内静謐
 のため和睦の義を仰出されし三好長慶あまを悦び御請申上事
 調ふを以て。天文廿一年正月廿一日將軍密泉寺と御立あつて歸洛
 まし。室町の御所ふ入らせ給ふ。程小執事細川右京大夫晴元ハ
 江州堅田小陣と取て坐したる。近年打継ぎ細川氏綱三好長慶
 らが爲る戦ひ負けし數千の慈を討せ軍慮の謀安くし。處又
 將軍御飯洛あつて氏綱長慶が罪科と宥めらるめ。関え。大

又歎息して所詮今世と遁まんらん如どとて同日髻と切く墨の衣
 に身と窶し堅田の山家と身と峙ぐて風ふ嘯き月ふ吟して坐する
 偕も京師より二月廿六日細川次郎氏綱舊科と宥めらるる同三月十
 一日天下の管領と補せし右京大夫に任じらるる三好修理大夫長
 慶相代つと執政と奉り氏綱の舎弟右馬頭藤賢三好老臣松
 永彈正少弼久秀在京輔佐の臣と成ふる
此時將軍十七歳長慶元一
 歳松永久秀四十三歳と
 長慶の摂州より下向し都へ松永久秀守護せし洛中より安堵
 の思ひをあらとてども今天下澆末の世に及で朝憲廢れ武威傾
 けし四夷八蠻してぐく乱れ臣としてん君と茂るる子に親と敵と
 一族兄弟立別れ兵革鉞楯と動く武命に背けり大樹の武權

も正慮と失ひぬ一度ハ細川右京大夫澄元ふ寵恩深く又一回ハ
 武藏守高国と以て腹心合躰し給ひ継ぎ其子氏綱と寵愛
 ましく亦渠と捨て右京大夫晴元と立ち今亦廢去して氏綱ハ
 執權と給る事七轉八變を大將軍の權謀くして御代へく永く
 保つ可きと貴賤密に譏りたる危ふく世中あり
 松永細川洛東ふ爭戰并義輝將軍室町又入御
 亦亦足利十一代の將軍家義植に去ぬ大永元年京都と落給
 ひく後阿州撫養にましくこれ世に阿波御所と申せり同三年阿
 州に薨む惠林院と號せ然るふ是より先義植御子まきまらるふ
 依て義澄代の御子義晴義維とてまはせり御二方より猶子

とありあひ義晴の京都の將軍あり奉り義維の阿州の御所又居ま
りしに阿波の元來三好と親しき國あり兼て三好と頼とあひ上
洛せん事を企てらるる故三好も將軍と追落し奉り阿波の御所義
維と將軍あり奉つんと内々これと謀りたる是に聞き前管領細川
晴元の隱遁の体よく江州堅田の山家小幡居して有るが密言上ふ
旨や有るん御免と蒙りて上洛せしと長慶傳へ関て大不憤り天文
九年八月河内勢二萬餘騎と引卒しと攻上りたる程ふ晴元入道將軍
と守護し丹波とさして落行し三好の將軍と恨み奉る色あり唯
晴元が所爲と惡むの事あるに數還御と勧め奉りたるより同月十
三日終ふ上洛すしゆりたる長慶晴元入道と攝州芥川の城ふ押さ

置りたる程ふ細川の威權をよきより大に衰へぬ翌九年二月九日御
名字を義輝と改め給ひ是まが義藤萬事長慶小任せ給ひ
程ふ長慶は在国して京都の事は凡て松永に執行せしむる程
ふ松永と將軍賞翫のあまり時々召出さるる御懇の仰と蒙る
事數回あり夫より久秀我身の卑賤より事と忘る斯る折るを將軍
と三好と互に中あはれ成り奉りある長慶怒りて將軍と謀り將
軍憤らせり長慶と誅せし事と企てらるる二の間と出ま
左あし時ふ我其中ふ立て大事とありとと思案と巡りたるに
事ふ觸るに三好が下知とらるる將軍家無禮となり細川一家と
幾同隸の如く侮り輕めらるる將軍の思しめらるる旨ありて棄



まろまどぐ
松永毒と
酒小調と
義長と
害せんと
謀る



置かせのひろろふ晴元入道此ころと因きて以外ほかに立腹たてはらし三好さんこうと之これも
細川被管ほそがわの侍さむらいあり其者そのもの近來ちかごろ出頭しゅつとうする過と分ぶんある其家人そのあひだも
松永まつながめが公方こうほうと蔑あやうみ我々われわれが一門いっもんと侮あやうむと奇怪きがいあり是こゝと制せいめ
天下てんか終つひふ乱みだれ君臣きんしんの道長みちながく絶たぬとて將軍しやうぐんと勸すすめ奉まかり松永
と誅つとむる由よしあり永祿えいりく元年げんねん九月くがつ軍勢ぐんせいと催促まよし將軍山しやうぐんやまの城
に入いらむめひままに松永まつなが彈正だんせい時ときを來きとと崔躡さいにし其身そのみ大軍たいぐんと帥
ひく白川しらかわ表あらわふ打うちて出戰しゅつせんと挑ひかり晴元はるもと入道にゅうだうの軍敗ぐんばい北きたへ東山
小逃こにげ上ありまると松永まつなが手重てぢゆうく責せ立たります將軍しやうぐんも無念むねんよ思召おもひよあり
詮方せんぽうありましくまる處ところへ長慶ながせい上洛じやうらくして松永まつながと退ひけ頼たのむ將軍しやうぐんへ
使者しやと奉まかり長慶ながせい更さらふ公儀こうぎと輕かろんど奉まかり候まをらば松永まつながが所為しよゐ

全まく以もつ不當ふたう候まをふまよりま戒いまめ沙汰さた仕つかるま。但ただし御所ごしよ様さま輕忽けいごつの
者ものどもが勸すすめ奉まかりましまと聞食きんじきのまままれま。稍ややもままますますますま軍ぐんと集ありますま。
と動うりませ給たまふと大將軍たいしやうぐんの御職ごしやく掌あふま似合にあひま候まをふま四海しやうかいの動亂どうらん
を鎮しづめ天下てんか恭平きんぺいの御謀ごぼうと廻まわらまはま御身ごみふ御座ござまませま宣のたまふ御
賢慮けんりよ所ところをませまらま候まをふま之これに依よりま御近習ごちんじゆの面々おももの内うちありま今度こんどの
張本ちやうほん入御にりご追放おしはな然しかるま候まをふま左ひだりも候まをふま洛中らくちゆう畿内きない靜謐じやうみ不ふ相成あひありま候まをふま
登のぼりま其上そのうへあまて長慶ながせい不肖ふせう候まをふま御前ごぜんを仕つかりま七道しちだうの端々はなはなありま
征伐せいばく候まをふま可べく候まをふまと言こと上ありま將軍しやうぐんも御難義ごなんぎの折おりと
ひひ三好さんこう申條まをさま當ありま理非りひ明白めいぱくありま其言條そのまを不任ふにんせま思
んとまままれま暗元あんげん入道にゅうだうを眼前がんぜんに捨殺すてころし給たまふと流石りうせきに痛いたまま思おもふ

カロいまど有無の御答へも何さり々々暗元入道御前ふ出某数
忠志と以て合戦不及とて微運中々勝利を得ば今ま三好
が申請とて偏某と以て仇とて愚臣退出さるふ於てハ殿中
無事不属一長慶が恨も散り候ふべし既出家遁世の身あり
雲水不任せし世を安く終んと素よりの所願ありと言上は營
中と紛ま出られし三好も速軍兵と引拂ひ常の装束をて出
仕し多ふより將軍も室町の御所へ還御まじりくは

三好長慶天下と管領に并義長第宅に將軍を招請に
三好細川の鉾楯謚は洛中良清定よりとて四維八方の擾乱一
日片時も止時あり関東関西の早馬乱鞍と拍より急あまバ執政細

川右京大夫氏綱年若ふして乱世の権柄庸愚短や叶ひ難く見へ
し將軍三好修理大夫と召さる。権職に居らる子息義長と筑前
守に任せしれ。自今以後細川不相代り。天下と管領さるべき旨捉意下り
たき三好の一族喜悦の眸と翻し。武威忠烈の上を震ひる。強宗莫と
列孫奢侈日比ふ百倍はとのへども將軍も外に援を奉る人も何とま
自ら長慶が計あまふ成せぬ。三好と御中よりあせ給ふよ
り。松永が謀りしとも空しくあり。容易く本意と遂んと難り
し。然りとてども長慶近年多病ありつるふより。存命畿程も
有まど。長慶死し後あそを謀略を廻らさむと思ふ外に長
慶が嫡子筑前守義長弱年あつる父祖の武畧を受継る。列々

あつさる成長るまへ是又尋常の事あり行ぐと只管肺肝を
 碎き如何ともあり義長と除き外に家督と立らんば大望成就も
 べしと朝暮み其方便をも廻らせり永禄四年正月廿三日筑前守
 義長將軍家へ御目見へのため上洛に今年廿歳あり山城國葛野郡
 梅津の里長福寺と旅宿とに父長慶の近來多病あり居城河内
 國讀良郡飯盛山に住せ置廿四日義長出仕しりまは將軍御機
 色斜ありに御賞翫のゆかり御相伴衆の列み召かへさせ給ひ且
 京都に逗留し政道と執行せしめと仰出させぬ御相伴衆と
 して山名一色赤松土岐六角京極武田上杉細川斯波畠山の一族等
 あり同二月朔日義長出仕しりまは將軍家御機嫌悪し御紋

と賜ひたりふ松永彈正少弼も同く御紋と拜領と
 桐の頭の紋と用松永久秀義長と勧め將軍家と三好の第宅小招請
 事と免さか奉らん事と計りたりふ三好が宅先例なれども御相伴衆の
 一獻と勧め奉らん事と願ひ奉るより言上ありたりふ將軍も今迄
 細川が被管たりし三好が亭へあせらる事如何と思しめども
 既小御相伴衆の列み加へらる上りて成らせらるる旨と仰出さ
 せらる夫のまへに三月小入て伊勢加賀守と御使より河内國飯
 森へ下りて修理大夫長慶と召させらるるふより廿六日長慶上洛し
 御紋拜領且義長の宅へ渡御の御禮と申上る是ホの事なり

初め定めらるる三月三日の延引小及び同月晦日小成らせ給ふ義長
 新ふ小算宅と上立賣の北木下の地は築き假屋平張と構へ列ひて
 餐應へ奉る將軍家も殊の外小歡をせぬ薄暮小及び還御まじく
 ろるあま小依て義長御送りのさあ出仕一夜小入て館小飯まじり
 松永よと時節と思ひ酒小毒と漬して是を勧めしうども終日乃
 饗應小心神疲まじり一獻も及ぶ帳内小入く休息あるし小
 より松永が計畧相違しつる事と悔しつらくと窺ひしうが
 三年と過て永禄六年に移り八月廿四日の夜中より義長腹痛
 頻ふ堪がじとて在京の良醫とえり服薬あるといふも更小
 其驗あて登る廿五日いふく身體惱亂して終ふ其日の夕方身没れ

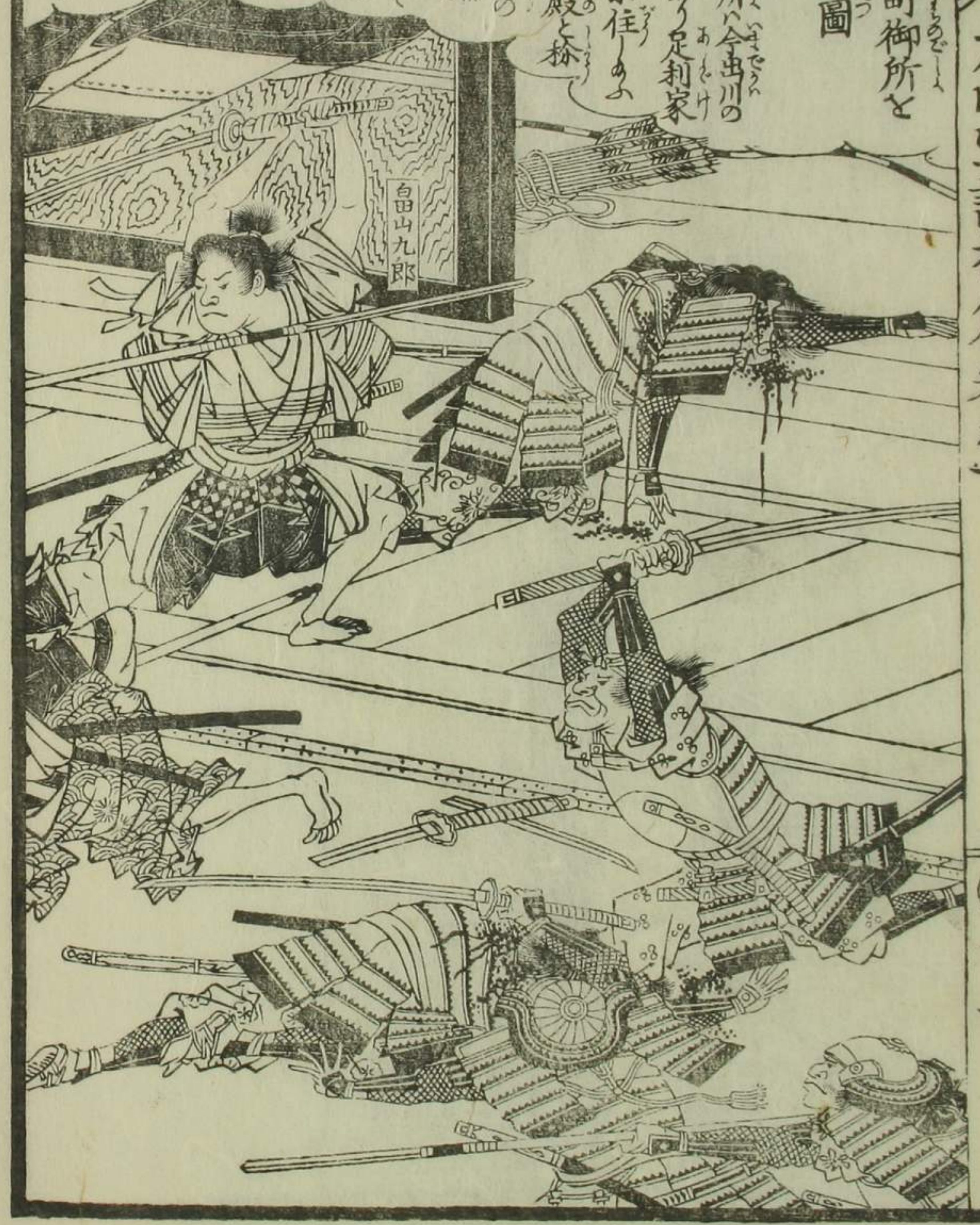
る。是は松永が所業ありと知者もろりと雖も久秀が威勢小
 恐まじく明白小言ひも出さる。斯有し程小父長慶大驚
 と直小上洛して是を詮議せしむるも更小其實と知りなく
 唯悲歎ふらるの余あり長慶余は男子ありまば如何いせん
 評定あり小松永彈正の長慶が舍弟十河民部大輔殿の子息
 と御養ひ有て家督となり給ふの外あまらんと勧めしうを
 長慶も爾せむやと心中小思ふまじり所あるは此儀ありともあり
 同心し則ち十河が長子義継と養ひく家督と立やがて筑前
 守小任し義長の勤と其ま相續ありらる是より後の松永が威
 権まじり日比小倍し道ありらる事ども多しうども義継らまを

制する力なく。養父長慶の年来の病疾漸小募り此頃小至りて
殊小大切あるより。永禄七年七月上旬小一族家人と集り遺
言ありける様の家督義継年あらず。日向守義興下野守政康
岩成主税助三人して後見とす。政道の只今まづの如く松永彈正
執行の義継と補佐とす。と言わら。同月四日終小黄泉の鬼と
あり。行年四十三歳とぞ。程小義継の修理大夫小任せられ忝
くも將軍の御妹君と下さ。婚姻と結ばせぬ。三好が一
族門葉奢侈ましく盛なり。就中三好日向守義興同下野守
政康岩成主税助ホる。と三人衆と稱へ互ひ小権とあ。を家督
修理大夫義絶の唯その位と守るのありて。万端松永が計ひたり

と三人衆又こそ忌嫉と内心常小不平ありて我意と震ひ將
軍と輕ん。失禮數回み及び。將軍家も長慶義長の昔と思
召さ。を給ふ。つけ。松永が振舞と憎ま。を。征伐は。あ
御勢ひも。ま。其まに。過。を。給ひ。自ら御気色
けき事も多う。何とな。松永と御中睦ま。又三人
衆も不和あり。此時故修理大夫長慶と。頼。阿
波御所義維の卒。給ひ。御子義榮。を。父公の御志と
つ。如何も。上洛。本意と。遂。を。平生三人衆と
餐應。馳走。も無。程小三人衆も。將軍と廢。奉り。
此君と取立。ま。を。思ひ。先松永。此事。有。と

逆臣室町御所と
攻奉る圖

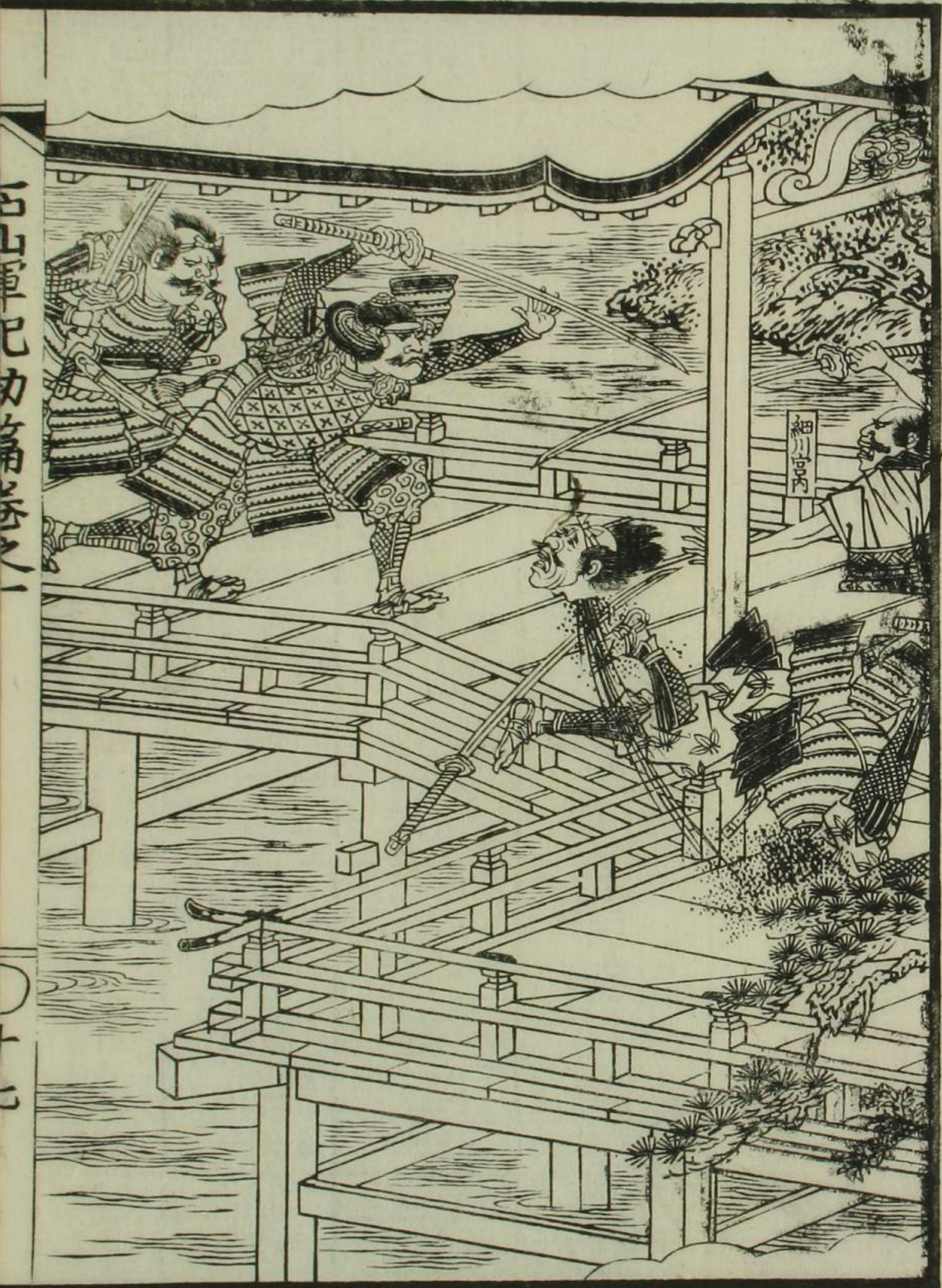
室町の御所へ今出川の
北室町あり足利家
代々此所に住りし
故に室町殿と稱
を善政公の
御時又新
館といひ
あり是を花
亭と号し
非小所謂
花の御所
見たり義
耀云逆臣の



為小裁せ
と申入終小
魔類も盛
裏誠小
感概
小堪

岩千代九





義輝將軍薨_レ後
 後六月七日
 龍大臣從位
 贈_レ光源院融山
 道田大居士と申_レ

相談ふ久秀答て云や將軍家某と惡ませ給ふ事甚く。且三人衆とも此比和睦トス。斯く何許忠節と盡しあふも將軍歡びあふ哉却て吾々の仇とありせぬ。後々時人み制せらるると云ふ速く阿波の御所と守まて當家繁昌の基と因るべし。阿波の御所も足利の血統ゆて當將軍より從弟君ふて傳ませば將軍宣下の事何の子細有らば三好一家の存亡唯此一舉ありと勧めし。三人衆尤も同トす。即ち阿州より上洛ましまし様ふと別の使と以て言ひ。余後合戦の用意頻りなり。將軍の門下の輩も且暮彼等が行跡を惡まらる者一人もあはし。處ふ謀反の企あるやと將軍因食さる密りふ彼輩と道

討あつて旨便宜の諸臣ふ仰合さるる事

三好松永將軍と弒て并室町御所を滅

永祿八年五月松永久秀將軍家小洛東清水寺へ御參詣と勸め奉り。此方の路次と警固のよめ人数を集むる由と披露し。兵とよ呼集り。同十九日の夜半小辻々と固めさせ。余後松永久秀三好日向守同下野守暗に御所と圍まらり。東の手へ三好修理大夫義繼四百五十餘騎。三本木東洞院小本陣と立南へ鳥丸春日表小松永彈正少弼久秀室町の大門口へ十河一存五百餘騎を押し。西大路へ三好笑岩齋三百五十騎。腹帯の地藏堂と後り當て陣と取北へ鳥丸櫻の馬場へ岩成全税助六百餘騎と押し。

御所の四面と打囲と東門小関と嘯と作まへ三方小是とくけく
 謀合せまご黎明曉天小一時小凱歌と奉りく洛中不徹發
 てその金翅鳥動り百千の雷り世界の壊滅此時と膽と冷
 魂と飛して驚愕せり三好が軍兵関と作らや否や築牆小手と
 うけ攻入んと進もる將軍のや此の事頭もれろと思
 り勿く騒げせぬ御氣色ぬあ。敵と内小入立てり甲斐あじ
 防げや人々戦へと將軍自ら采配と取らぬと大庭小出と
 給へ心得りと旬つくと先一番小討出る人々一色終路守同又
 三郎有馬源太郎上野兵部少輔結城主膳正高野伊豫守彦部
 雅樂頭同孫四郎沼田上野外同与八郎高木右近大夫川端左近太夫

牧馬孫三郎京極兵部少輔小林左京亮畠山九郎大館岩千代是
 等と宗徒の勇士と正兵突氣二百餘騎大庭小討つと爰と專
 度と防ぎ戦ひ大門と込出り込入り七度までを捲りくる中
 にも畠山九郎十四歳大館岩千代十五歳素袍の袂と結び揚げ白
 柄の薙刀水車小廻り主君小又向ふ天罰をば頻て報のとあひ知
 ると大音と雷つくと兩人を。群りくる敵の中小喚てくけ入敵七
 八騎薙倒し乱軍の中小討まらる盛りを待ぬ梅の花の嵐ふりく
 散がごとく元未多勢と無勢の戦ひ御所方多く討死し戦ひ勞ま
 て引て入る二番小杉原兵庫頭武田左兵衛佐朝日新三郎谷口民部
 丞治部三郎左衛門尉同弟福阿弥輪阿弥濫濟の心藏主同朋金阿

弥西川新右衛門尉足田弥四郎。松井新次郎。坂田孫次郎。西面左馬允
宗徒の勇士八十余騎。鎧先とそろへ弓筈と並べ散々射り。大
勢の込り。中あまひ虚鏃。更ふあう。門外小横。屍の丘の
どく。石墨と崩る。異あ。さ。も。敵の大勢。荒手と入替々々
つ。喚と呼んで攻寄り。三番う。細川宮内少輔。荒川治部少輔。二宮
弥次郎。寺司与三郎。飯田左播兵衛尉。木村小四郎。粟津甚三郎。同
仙千代。松原小三郎。同朋。松阿弥。慶阿弥。台阿弥。竹阿弥。今と取期と
進。つぐ。鎧先より火烟と出。防。戦。三好。兵卒。玉箭。小當
つ。く。死。痛手と負。庭下。小算。と時。小舟。く。死。と飛
く。乗。く。墻壁。小攀。上り。後。天罰。来。く。恐。我。先。と。功名と

争ひ操破らんと込り。御方も今。戦い。勞。或。討。或。痛手
と負。て。進。得。と。程。將軍。の。勢。猛。く。ま。ま。敵。や。御
所。小。攻。入。ぬ。と。因。あ。い。今。是。ま。く。なり。自。取。期。の。合。戦。悪。逆。無。道
の。奴。原。小。命。の。中。小。怨。と。報。聊。鬱。憤。の。霧。と。晴。んと。長。刀。と。つ。と。と
伸。べ。た。と。給。ひ。と

五月雨。露。う。あ。り。時。鳥。が。名。と。あ。げ。雲。の上。ま。ぐ
と。詠。を。て。あ。い。己。小。出。と。給。ひ。と。母。儀。慶。壽。院。殿。御。袖。小。紐。ら。せ。た
ま。い。暫。し。待。と。せ。御。方。千。騎。一。騎。小。討。り。迄。も。大。將。軍。の。其。場。小。在
て。士。卒。の。成。果。と。も。見。届。ま。と。ん。者。と。や。平。生。人。の。申。せ。と。因。と。り。
且。御。内。外。様。の。武。士。等。も。敵。小。通。路。と。支。へ。ら。と。御。所。へ。入。事。叶。と。ん。と

三本松小勢とぞ久く扣へりと因へし。聽て馳参るべしと泪小咽んで
 諫め給へども。將軍今極運時と待どるるあまひ。辞さるる小違あはれ
 あり。大庭小討出あひ重代貯へ置あひ。金銀珍宝重器のうどく
 と敵の中小抛入あひ。怒る雨る兵ども是と奪ひ取んと。塀とぞ
 勝蓋とるる。呼び呼んで押込る。思儘小敵と引うけ給ひ。長刀とり
 塀ふくじ。軍卒ホとぞ。胴切にぞりと切り。尻切ふぶと切あひ。數多
 の凶徒屍と外小横と。首の塀の此方。零つ御跡ふつ。兵ふの細川宮内
 少輔杉原兵庫頭朝日新三郎谷口民部丞死と。一場小極め。右点左点
 變化自在。戦い。く。究竟の敵百餘騎。唯片時の双小掛。とぞあひ。ふ。
 是ぞ項羽烏江の軍小自ら。鋒と携へ敵。當る。競も斯中。思ふれ

て勇ましく。形勢なり。此時將軍御方と願あひ。僅小六七騎。い
 過る。今此。亦殿中。ふり。入あひ。寂期の時。移り。あ。雜人等の
 手ふり。末世の人口小嘲ら。と口惜し。早疾せ。と宣へ。同朋金阿
 弥兼り。直小御殿。小火と放つ。其間。心静小御腹め。火中。小飛。火
 滅の烟と。共小御歳三十歳。とて消さ。せ。あ。哀。と。い。も。愚。なり。慶壽院
 殿。あ。御殿。い。と。給。ひ。と。女。姓。殿。原。引。と。め。是。い。い。る。る。御事
 ぞや。斯る例。世。小。あ。さ。う。く。候。り。一。先。南。都。の。方。へ。も。忍。を。せ。あ。ひ
 候。り。と。取。々。諫。め。言。せ。も。左。右。小。思。ひ。切。あ。ひ。と。朝。日。ま。つ。間。の。露。の
 身。と。何。存。つ。く。益。や。あ。る。逆。も。道。き。ぬ。道。の。未。死。出。の。山。三。途。の。川。ま
 ても。吾。子。と。俱。小。連。立。と。同。一。連。の。臺。小。あ。ひ。や。と。將。軍。の。御。死。骸。小

抱きつゝ。共ふ烟とありせめあぞ痛まじ。其外上臈端下小至るまで。
 冬の中身と焦と聞ふ哀と促さる見る小涙の止まらば嗚呼天
 下の主將とて仁義暗昧の代と保ち斯る墓あり御消息御代と繼
 せめゆと十六年の夢の中も雷光の影うつる間よりも早し今日を
 如何ある悪日あり有らん足利累世の繁昌善盡し美と竭し玉と粧
 ひ金と鋪し結構咸陽宮も劣らばと閑ろし御所も忽ち一時の烟と
 立昇りて是れ非也

繪本石山軍記初篇卷之壹終

